新出・蕪村評点帖

―南山城の俳諧と蕪村―

藤田真一

ここに翻刻紹介するのは、蕪村によって加点および句評が施された、新出の発句評点帖である。京都府城陽市の堀家に伝えられた資料のうちの一点で、二〇〇七年秋、京都府立山城郷土資料館（ふるさとミュージアム山城）における、「南山城の俳諧―芭蕉・蕪村・樗良―」展に出品された。図録には、一部の図版と内容の抄録、および概説（拙稿）がおさめられている。ただ、そこでは部分的な紹介に終わっているので、本誌上をかりて、改めて全容を示し、あわせてその意義について略述して、蕪村の俳諧活動の一断面に言及しておきたい。

本点は、一九八〇年代に城陽市史が企画されたさい、「堀家文書」として調査されたことがあったが、そのときはこれが蕪村の評点帖だという認識に至らなかったという。昨秋の展覧会を準備する過程で閲覧したところ、筆跡や点印からみて、蕪村にまちがいないと判断された。同様の蕪村自筆の評点帖は、断簡を含めて、三種が現存を確認されるのみで、四点目の出現[注1]ということになる。しかも、全体が完璧に残っている点や、内容の充実度からして、他の点帖に比べても意義深い点帖といってさしつかえない。従来、蕪村の夜半亭の活動において、洛南の俳諧集団はほとんど顧みられることがなかっただけに、新たな展望を予感させる貴重な出現と考えられる。以下本稿では、書誌と翻刻、および簡単な論評を掲げることとする。なお、本稿の一部に、右の展覧会図録に寄稿したものと重複する記述のあることを了解されたい。

一　書誌と翻字

【書誌】

冊数　一冊。

題簽　なし。

書型　横本。17・6×24・0㎝。

表紙　朽葉色（薄茶色）。卍つなぎ型押し。後補（原初は共紙表紙だったか）。

柱刻　なし。丁付に相当する書き込みなどもない。

丁数　墨付二十二丁（ただし、表紙見返しを除く）。

奥書　「漫考／夜半亭」。「春星氏」（朱印。ただし逆印）。「至印可省」。

【凡例】できるだけ原文に忠実であることを原則とするが、以下のような処理を施した。

1、漢字は現行の通用字体を基本とし、ときに正字体・異体字を使用した。また、仮名は、一部にカタカナを使用した以外は、通常の仮名文字とした。

2、読解の便宜のため、濁点・句読点（句評）などの表記上の配慮をした。原文に濁点がある文字は、右に傍点「・」を付した。

3、長点については仮に、長点一＝〈A〉、長点二＝〈B〉、朱点＝〈C〉と符号で下部にしめし、点印（浅葱色）は、句の左に【路傍槿】【春盡鳥啼】【魚三尾】としるした。なお、このほかの蕪村の点印は使用されていない。

4、加筆された蕪村自筆の批言は、〔　〕で示した。

5、本文の句頭には通し番号を振り、末尾の抜粋された秀逸句は別の番号を付した。

6、校合・添削・筆跡などについては、あとの論評でふれることとする。

【翻字】

長点一　一　点

同　二　三　、

朱　五　、

三字　七　、

四字　十　、

同加印　十五、

眼前致景　弐十、

名月　廿五、

題　春　雨　夏木立
秋の蝶　冬　籠

1　春雨に青海原や麦畠　A
2　春雨や心の届く艸の乳　A
3　淋しからずして春雨の静也　B
4　春の雨得と日暮る気色哉　C
【春盡鳥啼】　」（見返し）
5　春の雨夢中に哥を詠じけり　B
6　春雨に心ときめくや有馬山　A
7　振袖の昔がたりやはるの雨　A
8　降となき軒の雫や春の雨　C
【路傍槿】　」（1オ）
9　はるの雨晴て種売ル翁かな　C
【春盡鳥啼】　」（1ウ）
10　古寺や瓦も落て春の雨　C
【路傍槿】
〔しぐれよりハ、春雨のかた感ある心地す〕
11　琵琶習ふ法師が妻や春の雨　田原紅友　C
【春盡鳥啼】

12　遊ぶ手には蓑を作らん春の雨　仝有石　C
【春盡鳥啼】　」（2オ）
13　借シ馬のほたゆる小家や春の雨　A
14　春雨や見せから招く筋向ひ　C
【路傍槿】
15　雨つゞく春や野寺の謡講　美豆雅笑　C
【春盡鳥啼】
〔晋子が、木母寺に哥の会ありけふの月、といへる姿情にも似たり〕
16　春雨や餅のかび取る椽の先　A　」（2ウ）
17　春雨や窓から答ふ渡し守　B
〔しぐれにも〕
18　晴間暫し柳に垂るゝ春の雨　A
19　葉柳の濡てしだるや春の雨　A
20　春雨や切レ機のよき織加減　A　」（3オ）
21　糸竹のねがらみつよし春の雨　A
22　春雨や心に歩む花の旅　C
〔ちと古くさし〕
23　雨の日ハ雨に遊ぶや春は只　C
24　春雨に落つくうかれ心かな　C

【路傍槿】

〔玄〕（ミセケチ）

25 降レかしな麦痩たりと春の雨　A

〔玄旨の御句にも〕

26 春雨や吉水院の夢の跡　C

【路傍槿】

27 去ながら是も楽しいよ春の雨　A

28 虎眠る売薬店や春の雨　A

29 山越して海にも春の雨の脚　C

30 春雨や春失へる嵯峨の宿　A

〔今少し〕

31 山青し暫シは春の雨の隙　B

32 春雨や忘んとすれど花の■（ヒ）罪　B

」（4ウ）

〔花の罪、いさゝか〕

33 我春の雨夜明行く惜（根）（朱）さ哉　C

【春盡鳥啼】

34 溝を流る花や鱗や春の雨　C

夏木立

」（5オ）

35 貴も尊からぬも夏木立　A

」（3ウ）

〔実語経〕

36 日盛や松も眠て夏こだち　C

37 梟の寂所安し夏木立　A

38 柴の戸や奥も有げに夏木立　C

39 松柏の冬を凌てや夏木立　A

40 はや暮のかゝる鞠場や夏こだち　B

41 こんもりと隠家見へぬ夏木立　A

42 世ハ夢と悟の前やなつ木立　A

」（6オ）

43 一里来て休む一木の茂リ哉　A

〔題にかなハず〕

44 夏木立柳ハ柳とながめけり　A

45 イるおふないぶ（女）かし夏木立　A

〔解がたし〕

46 何処を見て風を尋ん夏木立　A

」（6ウ）

47 夏こだち下行風のなかりけり　B

48 なつ木立岩間に眠るおやぢ哉　A

49 短か気も眺は同じ夏木立　A

50 聞馴し鐘の音遠し夏木立　B

」（7オ）

51 盛ある花にも有リやなつ木立　B

52 月影のかハる勝手や夏こだち　C

【路傍槿】

53 奥深く森の茂けり夏木立　A

54 火焼せば末社へ遠し夏木立　A　」（7ウ）

55 宮へ行道ほのぐらし夏木立　A

56 斧の音山路に聞くや夏こだち　A

57 木曾路行木だちの闇や小雨降ル　A

〔木だちの闇、いかゞ〕

58 夏木立祭の跡の静なり　C　」（8オ）

【春盡鳥啼】

59 椽の先まづうつとしや夏木立　C

60 峯の寺も別世界也なつ木立　A

61 影なせる小き家や夏木立　A

62 事問んむかしの一字夏木立　A　」（8ウ）

63 陶持て太郎も眠る夏こだち　A

64 田の中に村の小社や夏木立　A

65 涼しさに吹しほり凪夏木立　A

66 夢殿の昼も小暗し夏木立　山肆連　C　」（9オ）

【春盡鳥啼】

67 市人のやすらひ群つ夏木立　A

68 茂る樹の蔭に旅僧の鼾哉　A

秋の蝶

69 野分より蝶の羽風も小り、敷　A　」（9ウ）

70 蝶〳〵の一口吸ふや別れ露　A

71 蝶飛てうからぬものを秋の風　A

72 草の露こぼしぞ廻る秋の蝶　寺田秦夫　C　」（10オ）

【春盡鳥啼】

73 夢覚て秋に驚くや草の蝶　C

【路傍槿】

74 ながらへて暴風に蝶のうきめ哉　A

75 耶（注2）鄲の枕の夢や秋の蝶　A

76 猫の子のそつと手を出すや秋の蝶　A　」（10ウ）

77 秋の蝶萩の下枝にゆらぎけり　A

78 二日咲く木槿を蝶の別れかな　B

79 野分してあやしくも蝶のこぼれけり　A

80 一ッ宛身に入風や秋のてう　A　」（11オ）

81 吹るゝを己が風情や秋の蝶　A

82 おのづから日〳〵衰へぬ秋の蝶　A

83 立秋や友ほしげなる蝶一ッ　B

84 日当りに羽も弱〳〵し秋の蝶　A　」（11ウ）

85 力なく萩みる蝶の哀なり　A
86 里に来ていと哀さよ秋の蝶　A
87 くさむらや其日に替る秋の蝶　A
88 野に見れば生かえるも有リ秋の蝶　A　」（12オ）
89 露落て漸に飛てう〳〵かな　A
90 見るうちに影なく成るや秋の蝶　C
【路傍槿】
91 蝶〳〵の月にはうとし秋ながら　C
【路傍槿】
92 鶏頭のあたま御免と蝶々哉　A　」（12ウ）
93 芋の露嘗つゝ蝶の舞作り　A
94 露に濡て蝶の羽たるき夕かな　A
95 秋の蝶の飛そこなふて暮る哉　B
96 草の花に翌や忘ん秋のてう　A　」（13オ）
97 秋の蝶替らで今のすがた哉　A
98 何心なくとらへけり秋のてう　C
99 おめ〳〵と生をも替へず秋の蝶　C
100 秋のてう松にたよりて哀也　C　」（13ウ）
101 伐払ふ藪に羽重し秋の蝶　B
102 夕露に蝶の弱這ふ籬哉　B

冬籠

103 冬籠縁と成たる梅柳　A　」（14オ）
104 葉を落す木も程〳〵の冬籠　A
105 冬ごもりひずミの見ゆる柱かな　寺田敬上　C
【春盡鳥啼】
106 此月も十日立けり冬ごもり　C
【春盡鳥啼】
107 我にひとしき人床しけれ冬籠　C　」（14ウ）
【路傍槿】
108 琴の音をたちし身果や冬籠　A
109 あハれ世の情を知るや冬ごもり　A
110 仮名書の世界に成るや冬籠　A　」（15オ）
111 冬籠粥にへ（熟）る音炭の音　B
112 大寺や明放しと見へて冬籠　A
〔句づくり今少し。浅し〕
113 漸老て筆の伝授や冬籠　A
114 懐に猫も啼けり冬ごもり　A　」（15ウ）
115 鉢植の座敷にもあり冬籠　B
116 飼猫に袋着せけり冬ごもり　A

117 投入に心尽しやふゆごもり　A
118 ぞん分に着ながら寒し冬籠　A　」（16オ）
119 指折て炭つく老よ冬籠　A
120 冬籠解る障子や除夜の鐘　A
121 浦吹る気色ぞ凄き冬籠　A
122 狆に菓子預ヶても見ん冬籠　A　」（16ウ）
123 本を手に二枚屏風や冬籠　A
124 松風を昼も添乳や冬籠　A
125 ごと〳〵と麦茶煮へけり冬籠　C
126 炭取のすミの行衛や冬ごもり　A　」（17オ）
127 冬籠炭玉あかしたどんの火　A
128 摺墨もいつの儘也冬ごもり　A
129 籠居て外山の冬を聞侘ぬ　C
【路傍槿】
130 ひたすらに好むでもなし冬籠　C　」（17ウ）
【春盡鳥啼】
131 飼犬に袖なし着セて冬籠　A
132 鳥啼て外面の雪や冬ごもり　A
133 梅一枝春の便りやふゆごもり　A
134 冬籠あるハ念仏も聞へけり　C　」（18オ）

135 牡丹咲て黄門殿の冬籠　A
136 冬ごもり師走と計知る身哉　C　」（18ウ）
【春盡鳥啼】
漫考
夜半亭【印＝「春星氏」（逆印）】
至印可省　」（19オ）
Ⅰ 春雨のとくと日暮るけしき哉　寺田秦夫
【春盡鳥啼】【魚三尾】
Ⅱ 我春の雨夜明行うらみかな　山肆連
【春盡鳥啼】【魚三尾】　」（19ウ）
Ⅲ 夏木立祭のあとの静也　岩田迂童
【春盡鳥啼】【魚三尾】
Ⅳ 冬ごもり師走とばかり知る身かな　山肆　」（20オ）
【春盡鳥啼】【魚三尾】
Ⅴ ひたすらにこのむでもなし冬籠　深草亀水
【春盡鳥啼】【魚三尾】
Ⅵ 此月も十日たちけり冬ごもり　寺田秦夫
【春盡鳥啼】【魚三尾】　」（20ウ）

Ⅶ　春雨の晴て種売翁哉

【春盡鳥啼】【魚三尾】

月竝発句合
賞花高低如左

寺田　秦夫　四十五点
岩田　迂童　（この一行挿入）
　山肆　弐十四、
　仝連　弐十三、
淀　泉志　弐十、
　南窓
岩田　迂童　十九、（この一行抹消）
淀　富葉
　賀瑞　十八、
深艸　亀水
寺田　敬上　十五、
淀　ノ之　十四、
田原　紅友　十三、
仝　有石
艸内　雲里

淀泉志

」（21オ）

美豆　雅笑　鳩祇
　巴大　十弐、
深艸　山人
淀　魚里
田原　正石　十、
淀　一交連
　玉州
淀　几蝶
仝　一交　八、
　霞卿
美豆　好之
神足　重山
淀　花夕　六、
　賀連
淀　五水
仝　魚悦　四、
仝　春霞
深艸　慈風
神足　蓮花女

」（22ウ終）

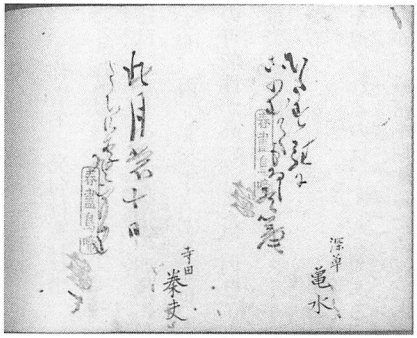

図2　秀逸抜粋句（20ウ）

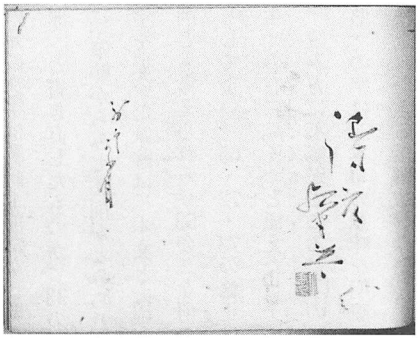

図1　奥書（19オ）

二　論評

内容の吟味にはいるにあたって、書名について一言しておく。書誌にあるとおり、外題・内題等の表題はない。二十一丁裏以下の参加者一覧の冒頭にみえる、「月並発句合」の名称を用いることも可能だが、後述のように、本書を特定する名称とはいえない。そこで蕪村の点と評を備えた点帖という意味で、「蕪村評点帖」と仮題しておく。

まず、混在する種々の筆跡について説明する。全体として、蕪村の手になる筆跡と、それ以外のものに大きく分けられる。蕪村の筆跡は、発句の左にしるされた句評、奥書、十九丁裏以下の秀逸抜粋句（作者名をのぞく）、これらに認めることができる。句評は、計十二箇所におよぶ。なお、24句目の「玄」は、次句への批言を誤記入したためミセケチにしたものだろう。長点の墨筆・朱筆も、他の蕪村評点帖に徴して、蕪村じしんの手になるとしてよい。これ以外はすべて別筆だが、筆者の特定は困難である。

蕪村以外の筆者はすべて不明ながら、複数の筆跡が認められる。記事の性質によって区分けして、他筆のみ順に掲出する。

〈見　返　し〉　①評点一覧、②四季題

〈本　　文〉③発句、④校合、⑤添削、⑥添え字、⑦作者名
〈秀逸抜粋句〉⑧作者名（発句は蕪村筆）
〈巻末集計覧〉⑨作者名、⑩点数

これらの筆跡は、とりあえず以下の四種に分類できる。甲＝①、乙＝②③④⑥、丙＝⑤、丁＝⑦⑧⑨⑩、である。ただし、甲と丁は同筆の可能性が高い。また、丙と丁も同筆かともみられるが、確定はできない。もし甲・丙・丁が同筆ならば、二筆ということになる。

微妙な判断を迫られるのは、④⑤⑥である。些事に属する作業かもしれないが、厳密を期するために、あえて一つずつ検討を加える。32の元の文字は解読不能だが、変な字体になったので、改めて「罪」と書き直したものか。33の「惜さ」を「恨」に変更したのは、筆跡からみて添削かとみられる。45「おふな」に「女」の漢字を振った筆跡は、本文とは別筆か。とすると、蕪村による添削とも考えられる。53の二ケ所の変更は、本文とは別で、添削としてよい。65・72・73の修正は、校合の結果だろう。88で「生」の右に「イ」と添えたカナは、本文と同筆と認められるが、読み方に不審がのこる。111の「にへる」の左に添えられた「熟」の字は、本句の意味を明瞭にするためにあてられたもの。検証にたえる用例数とはいえず、この判断は動く可能性もあるが、乙と丙が別筆であることはまちがいない。

つぎに、この点帖がどのような経過で現在のかたちに至ったか、企画の発端から完了までの想定を試みる。まず、四季の季題が投句者に通知され、各人は季題に応じた作品を幹事（主催者）のもとに届ける。幹事はこれを整理して、清記にまわす。校合作業を経て、清書された本を点者（蕪村）のところへ送る。そこにはむろん、作者名はいっさい記入されず、伏せられている。点者は評点や点印を施し、さらに秀逸句を書き出したうえで、幹事に返送する。戻された点帖と、手もとの投句控えとを照合、適宜作者名を明記する。さらに投句者全員の合計点を算出し、巻末に一覧表を作成・記入して、一連の作業は完了する。

この手順で欠落している事柄が二点ある。ひとつは、数例ながら存する添削である。もし蕪村の手になるものとすれば、ほとんど問題はない。だが、別人の添削とすると、だれが、またどの段階で添削したのかわからないことになる。

もうひとつは、見返しに墨書された、蕪村の評点一覧である。この一覧は、柿衛文庫に所蔵される蕪村の「点譜」にほぼ合致する。本書の「長点一」は点譜に略され、また「同二」（長二点）は、点譜では「長三点」と表示されているが、それ以外はつぎのような対応をみせる。本書―点譜の順に示すと、「朱」―「朱五点」、

「三字」―「路傍槿」＝七点、「四字」―「春盡鳥啼」＝十点、「同加印」―「魚三尾　加印」＝十五点、「眼前致景」―「春艸没入処蛙飛闇水音」＝二十点、「名月」―「明月照池上流光正徘徊」＝二十五点、となっている。「眼前致景」と「名月」が評語を異にしているが、後者は同一の芭蕉発句にもとづくものと考えられる。「眼前致景」は、自筆で書き込まれる別の評点帖があり、また別には、「唐崎松朧於花」の点印を用いる評点帖も存在する。使用年代の前後関係は未考である。

さて、問題はこの評点一覧が書き込まれた事情である。蕪村自身の筆跡ではないので、評点が加えられ、蕪村から返送される前か後に記入されたと考えるのが自然だろう。夜半亭の関係者か、もしくは幹事周辺の者にかぎられる。いずれにしろ、受け取った者が、蕪村の点印を承知していないためだったと推測される。筆跡の精査を含めて、今後さらなる検討が必要である。いまひとつ不審なのは、本書では使用されていない「眼前致景」と「名月」の高点印譜まで書かれていることである。蕪村が使用している点印を総覧するつもりだったのだろう。また、奥書に記載される「至印可省」ともかかわるゆえ、のちに再説する。

ここで、加点の段取りについて私見をのべる。第一段階として、各句頭に一点から三点まで、三種類の長点を引く。(注3)このうち三点と評価された句のなかから、さらに秀作にたいして、三字の「路傍槿」と、四字の「春盡鳥啼」の点印が捺される。おそらくこの段階までに、評語も書き込まれたと推測される。清書された正規の発句への加点・句評はこれで成就したことになり、役目を果たしたものとして奥書を添えた。しかし、蕪村はさらなる作業にとりかかり、「春盡鳥啼」の作品から秀逸の七句を選んで自書、そこへ魚三尾の印を付して、十五点に引き上げることとした。(注4)Ⅶ泉志の「春雨の」の句は、本文では上五を「春の雨」とするが、改作したのではなく、単純な誤記とおもわれる。以上で、点者としてすべての任務を終えたことになる。

つぎに、本篇の全百三十六句のうち、作者名が記入された六句についてふれておく。巻尾の秀逸句のすべてに作者名が記載されるのは、順当なところだが、本篇でも計六句に記名が認められる。いずれも「春盡鳥啼」と評価された作である。じつは同じ点印が与えられた句はあわせて十三、うち七句が巻末の秀逸句に選抜され、残り六句の本文句末に作者名がしるされた。言い換えると、巻末に名前入りで選抜されなかった、「春盡鳥啼」印を得た作者が、本篇に記名されたということだ。そうなると、「春盡鳥啼」の評価を得た句について、すべての作者名が明示されたことになる。高得点句への称讃を意味する、格別の計らいだろう。

さて、評点とはべつに、蕪村がしるした句評を一瞥しておく。加評された対象は、計十二句。うち、賛辞と認められるのは、10と15のわずか二句、大半は批判ないし苛評にちかい文言が書きつけられる。全体に辛口といわざるをえない。ただし、「古くさし」とか「今少し」などの評言は、他の蕪村評点帖でも目にするものであり、また類句・類想の指摘も折にふれてなされている。したがって、過度の辛口評というわけではない。

とはいえ、「題にかなはず」「解がたし」の指摘は辛辣で、その結果、二十点や二十五点の高得点が与えられることはなかった。「至印可省」の付記は、最高点を出すほどではありませんでした、という意思表示と解される。蕪村の文学的潔癖性とみることができる。依頼者や参加者への世俗的な配慮よりも、作品への忌憚なき評価を旨とした。これも本書だけにみられるものではない。蕪村の基本姿勢なのだろう。俳諧を生業としない俳諧師蕪村、その立場からするとしぜんな成り行きともいえる。

巻末に、この企画への全参加者（投句者）三十四名の名寄せが、合計の点数順に列記される。三十四という作者数と、全百三十六句、それに四つの兼題を勘案すると、一季題につき一句、各人四句ずつを投句したと想定できる。その合計が百三十六句ということになる。最高得点を取得したのが、寺田の秦夫の四十五点だった。むろん、投句した全四句の総得点である。その秦夫に褒賞として本書が与えられ、それが今日堀家に伝わった所以とみられる。

作者の所付けによると、伏見・淀から以南の地域で大半が占められている。蕪村は、伏見とは鶴英以来の交渉があったものの、南山城の地域とのつながりは、従来ほとんど顧みられなかった。当地は、むしろ武然と密接な関係があった。かれの『春慶引』には、毎年のように富葉・山肆・迂童・雪洞らが「城南社中」として入集しており、本書のメンバーとの重なりが確認できる。しかしそこでは、「他境」と区分けされ、武然門の中核とは一線を画する扱いだった。蕪村の安永四年『春興帖』でも、「淀社中」という別立てで、満耳・泉志・山肆・雪洞らのグループを遇している。夜半門からは、その程度の距離があったということになる。蕪村にとってもまた、「他境」であったのだ。

巻末一覧表に「月並発句合」と題されるのは、あくまでもかれらの月並であって、蕪村が毎月これに付き合っていたわけではない。このときかぎりの点者勤めだったとするべきだろう。作者一覧直前に表示される「月並発句合」は、このたびの句合に限定される企画ではなく、かれらの月々の活動形態を意味すると考えられる。したがって、「月並発句合」を、本書固有の

表題としえないことになる。

最後に、年代に関して一考を加えておく。安永四年閏十二月十四日付の山肆宛の手紙のなかで、蕪村は「月並発句合愚評、則飛脚へ差遣候」と報じている。これが、この点帖に相当するとすれば、安永四年の企画ということになる。「月並発句合」という名称の一致は、偶然以上の裏付けとしてよい。この線上で考えると、巻末の高点作者のうち、山肆のみ所付けが省かれているのは、山肆の中心的役割をむしろ裏書するものともいえる。安永四年の蕪村春興帖への入集状況とも齟齬はしない。

安永四年といえば、蕪村が俳諧宗匠となって五年、一時の危機的状況を脱して、夜半亭の活動が順調な足取りをみせてきた時期である。北陸や名古屋あたりからも注目される俳人となり、蕪村の俳名が高まる趨勢にあった。城南の俳諧連中も、そんな洛の宗匠に点を請い、指導を仰ごうとした、それがこの評点帖だったとみることができる。

絵師としての活動も順調だった蕪村にとって、むやみに俳壇的な拡張路線をとる必要はなかったはずである。地方俳人との交際も、蕪村のばあい、俳諧の裏にたいてい画用が連れ添っていることが多かった。洛南俳壇との付き合いも勢力拡大とは無縁のものであり、句合の点者を要請されたからといって、そこから先の野望を抱くなど、あるべくもなかった。

だからこそ、蕪村は寄せられた作品に虚心に向き合って、坦懐に評価をくだしていったものとおもわれる。それが、せいぜい十五点どまりで、二十点、二十五点という夜半亭蕪村としての高点なしでも済んだ一因だろう。それはなにもこの句合がことさら低い評価だったというわけではなく、他の評点帖でも似たような傾向をしめしている。巻末に高点句を書き出して、賞美を惜しまなかったところに、蕪村のこまやかな配慮がにじみ出ている。点者としての仕事をおろそかにせず、誠実にやりとげたなによりの証しである。

【注】

1、右図録では、断簡を考慮せず、本点をふくめて、現存三点としたが、ここで改めておく。

2、「邯鄲」の誤記。

3、三点は墨二、朱一で、そのうち朱点がかならず中央に引かれているが、その理由は不明。

4、柿衞文庫所蔵の評点帖でも、同様のはからいをおこなっている。

（ふじた　しんいち／本学教授）